

作文の添削と文体差

中川 正弘

0. はじめに

外国人留学生在が日本語で書いた作文に対して行う添削は、文章の内容には手を付けず、単に誤りを正しく、本来あるべく様に書き直すだけの事であり、誰がやっても同じように、客観的に行えるものだと思われやすい。しかし、これは読むこと、書くことに関わる行為であり、そう単純に事が運ぶわけではない。どうしても主観という不確実で曖昧なものが関わってくる。

言語の分析や記述において、感覚的なもの、主観的なものは排除されがちだ。しかし、人間の言語能力は文法書や辞書に記述される言語の客観的、公準的な知識だけでできていくわけではない。感覚、主観という不安定な意識領域がなければ人間の言語の自然な状態ではないはずだ。言語、ことばについての考察は、客観的であろうと心がけるにしても、この不確実な領域をまったく省みないですむはずがない。

言葉を使う人間の意識のこの側面を積極的に見ることに大きな意味があり、そのような場が言語教育に必要だということ、また、それがどのように実践できるか、その可能性をこれまで論じてきた¹⁾。ただ、これまでの考察では、外国人の書いた日本語作文を読んで添削する一人の日本人の意識にどのような思念が生起するかを見ようとし、これが他の者であれば、どのように違った意識行為があり、その結果として添削の仕方がどう変わってくるかというようなことは深く問わないでいた。添削はただ一人の手に委ねられるのが普通であり、同時に何人もの添削者によって行われることはまずないからである。添削と言うと、誤りを正しく書き直すだけであり、正しい書き換えの可能性はただ一つしか存在しないように感じるのも、一人の手で、それも一度だけ行われるのが普通だからだろう。しかし、主観がその実相を示すのはやはり他の主観と比べ、その差異を見る時であり、そうする以外に主観が主観であることも確認しにくい。

そこで、本稿においては、一つの作文を何人もの添削者が書き直した場合、そこにどのような違いが表れるのかを見てみることにする。これまでも考察の前提として、添削が複数の人間によって行われる時、だれもが客観的に、唯一の共通の正解を求めるという風にはならず、添削者の個性、文体意識によって違いがでるだろうとは予想していた。だが、実際何が違ってくるのか、これまで検討された例も知らない²⁾。一人の添削者における書き直しのヴァリエーションについて考察した時と角度を変えて見ることで、「ことば」という

現象にもう一步迫れればと思う。

1. 書き換えのヴァリエーション

書き換えと言っても、ある言語で書かれた内容を別の言語で書き直す翻訳では、**直訳**、**意識**という概念が書き換えの両極を示している。語数、構文などで原文に対して忠実に、言葉の表現面が持つ特徴をできるだけ保持しようとする直訳、これに対して、原文が「主に」伝えようとした内容に焦点を合わせ、語数、構文などはがらりと変わってしまっても、これを明確に表そうとするのが意識であろう。直訳においては、内容を解釈しないまま、使用頻度の高い訳語にただ置き換える、いわゆる「機械的翻訳」が、原文にはなかった「難解さ」を意味として付加してしまったり、まったく意味をなさない文を作り出したりする負の面があるが、一方、分かりやすく、意味も通るはずの意識でも、その「解釈」が的を外れたり、原文にはなかった意味を付加してしまう可能性があるのだから、一概にどちらが優れているとは言えない。

ここで問題となるのは**内容**と**解釈**の関係だ。これを考えるためには内容における二つの層だけははっきりと区別しておかねばならない。その一つは、複数の表現形式で同じように伝えることができるようなものとしての内容であり、もう一つは、表現形式そのものに内在し、一語換えただけで、もう保持できなくなるようなものとしての内容である。意識は前者の内容を伝えることができる、あるいは伝えやすいと言える。他方、後者の、同じ言語における書き換えでも変わってしまうような言葉そのものの内容は、いくら忠実といっても他の言語に置き換える直訳が完全に保持できるわけがないが、これら二種の内容のうち、言葉そのものに含まれるものに焦点を合わせていることだけは少なくとも示せる。翻訳のヴァリエーションはこのような意識と直訳（誤訳を加えれば三極とも見える）の間に広がっている。

さて、それでは添削という書き換えにおいてはどのようなヴァリエーションがあるのだろうか。外国人の日本語作文についてなら、できるだけ**客観的**に誰もが確実に誤りと判定しそうなところだけを書き直すに留めようとするのが普通だ。他方、日本人の書いた日本語を添削するとなると焦点がまったく違う。特に自分が書いた日本語の文章では、文章を練る作家ほどではないにしても、書き終えてから、あるいは書いている途中で書き直すことは誰にもあるはずだ。そういう時に問題となっているのは文法などの客観的に扱える誤りよりも、「曖昧だ」とか、「長たらしい」とか、「ゴロが悪い」とか、言語感覚、美意識に関わるものであったり、時には内容を変更しようとする非常に**主観的**なものだろう。

このように考えると、添削では質だけが問題のようだが、実際には量的な側面もある。日本人の日本語を直す時、何かおかしい、もっといい表現があると感じた時でも、その人

の使う言葉を変えてしまうことに躊躇いや遠慮を感じることもある。それは、人の言葉が自分の使う言葉と少し違っているのは当然と思い、その違いをその人の個性の表現として受け入れるからだ。自分の言語感覚からすると、「曖昧」、「長たらしい」、「ゴロが悪い」などと感じられる言葉も、それがその人の個性であり、文体であると思えば直す理由がなくなってしまう。こういう感じ方は日本人の日本語を読んだ時だけかと言えばそうではなく、外国人の日本語を読んだ時にもあるものだ。外国人らしい変な「なまり」に限らず、極端に言えば、かなや漢字の書き間違い、完全な文法間違い、言葉の選び間違いもすべて、その外国人の個性の表現だと見て見れなくない。作文でならすぐ直すような間違いでも、会話をしている時には訂正せず、そのままにしやすいが、それは、ただいちいち直している時間の余裕がない、話がとぎれるからというより、コミュニケーションはこうした言葉の異常自体も付加的な情報として受け入れるものだからであろう。使い手が意図した異常である**レトリック**も、意図しなかった異常である**間違い**も、メッセージの受け手に引き起こす効果から見れば同質の意味作用とも言える。

結局、書いた人間の個性の表現としての文体は元の文にしか完全な形でないということであり、添削という書き換えは、やはりこれを変形することに違いない。明らかな間違いを書き直しただけでも、その書き直しの分やはり書いた本人の文体からずれていく。ましてどこもかしこも真っ赤に朱を入れるとなると、誰でもその添削を「攻撃的」と感じるだろう。従って、添削において**消極的**になる者が多いのも当然で、**積極的**にとことん書き直すとするには何か特別な動機が必要だろう。積極的に添削を行おうとしながらもそれと同時に消極的であろうともする、そんな場合も少なくない。

言葉の向こう側に踏み込んで書き手が伝えようとした内容を探り、そこに解釈できた内容に相当と思える表現をどしどし与えていく積極的な添削は、翻訳における意識に似ている。また、書いた人間の文体を尊重し、消極的に行う添削、それは言葉そのものに含まれる内容に解釈の焦点を合わせていると考えれば、翻訳における直訳に似ている。翻訳であろうか添削であろうか、言葉を書き換える作業は内容の次元に関わらざるをえないのである。

外国人の日本語作文

「日本のテレビ」○

日本は私の国と比べて、テレビのチャンネルが多いと言える。私は1ヵ月ぐらい前、友だちがテレビをくれたから、よく見ていた。実は、チャンネルは6つあるので、いろいろな番組の中で選べるのだ。ドラマ、クイズ、スポーツなどで好きなことはたくさんあると思う。日本語を練習するため、一番いいのは、ニュースだと思うが、まだ少し難しいと思う。一番難しいのは、歴史的な映画だと思う。こんな時代の話し方は今より違うのだ。

クイズは楽しいが多くの場合はあまりわからないのだ。現代ドラマは、話しがいつも同じなので、わかりやすくなっ

てしまった。

楽しむため、外国語会話の番組を時々見ている。くつろぐためには、外国の映画は、テレビに二語システムがついているので、いつも原語版で見ている。

文句は一つあるが、コマーシャルが多すぎると思っている。

消極的添削

「日本のテレビ」A-1

日本は私の国と比べて、テレビのチャンネルが多いと言える。私は1ヵ月ぐらい前、友だちがテレビをくれたから、よく見ている。実際、チャンネルが6つあるので、いろいろな番組の中から選べるのだ。ドラマ、クイズ、スポーツなどで好きなものはたくさんある。日本語を練習するために、一番いいのは、ニュースだと思うが、まだ少し難しい。一番難しいのは、歴史の映画だと思う。こんな時代の話し方は今とは違うのだ。

クイズは楽しいが多くの場合はあまりわからないのだ。現代ドラマは、話しがいつも同じなので、わかりやすくなってきた。

楽しむためには、外国語の番組を時々見ている。くつろぐためには、外国の映画は、テレビに音声多重システムがついているので、いつも原語版で見ている。

文句は一つあるが、コマーシャルが多すぎると思っている。

積極的添削

「日本のテレビ」A-2

日本は私の国と比べて、テレビのチャンネルが多いと言える。私は1ヵ月ぐらい前、友だちがテレビをくれたので、よく見ている。実際、チャンネルが6つもあると、番組をいろいろ選べるのだ。ドラマ、クイズ、スポーツなど、おもしろいものはたくさんあると思う。日本語を練習するために、一番いいのは、ニュースだと思うが、私にはまだ少し難しいと思う。一番難しいのは、時代劇だと思う。昔の言葉遣いが今とは違うのだ。

クイズは楽しいが、多くの場合あまりわからないのだ。現代ドラマは、話していることがいつも同じなので、だんだんわかるようになってきた。

日本語ばかりだと疲れるので、外国語講座を時々見ている。のんびりするためには、外国の映画を見るのだが、テレビに副音声システムがついているので、いつも原語版で聞いている。

イヤなことは一つある。コマーシャルが多すぎることだ。

添削をしていると、文法的に誤りがある訳ではないが、どういう意味なのか判然としない、あるいは、何通りかに解釈できる箇所によく出会う。正確を期せば、作文を書いた本人に表そうとした内容を尋ねてみなければならないところだが、添削は作文を書いた本人のいないところで行うことが圧倒的に多く、客観的であろうと心がけていると、明らかな間違いではないのだからと、そのままにしてしまいやすい。これは、一種の解釈習慣ともなる³⁾。読んでいる者が両義的で曖昧だと感じる表現は、そのような言葉を選んだ書き手自身がそのように両義的で曖昧な内容を表現しようとしているのだと扱ってしまう。つまり、書き手の意図は読み手の理解に一致していると考えやすいのである。これは客観的であろうとしていて実は主観的になってしまうようなものだ。

逆に、積極的な添削は、主観的だと見える一方、内容が曖昧で分かりにくいと感じた時、文章全体から整合性のある内容を解釈、判定し、それがはっきり読み取れる表現に書き換えるのだから、客観性を心がけていると言えなくもない。

例えば、上に例示した作文で「歴史的な映画」と書かれている。このままで間違いを含んでいるとも言えないが、きわめて曖昧だ。「歴史的な」は「歴史の」とも少し違い、このように使われると、「歴史に記録されるほどの重要な意味がある」ぐらいの意味になってしまう。そのような意味を表そうとした可能性がまったくないとも言えないが、この文章を書いたのがフランス人学生だということも考慮すると、「歴史」という名詞から派生した形容詞を日本語化する時、一番頻度が高いと思える「歴史的な」で表しただけだろうと解釈できる。するとこの学生の意図にぴったりの言葉は「歴史映画」か「歴史の映画」ぐらいだろう。

ところが、この学生の表そうとした内容が「歴史映画」、「歴史の映画」という日本語の意味するものであるとしても、まだ問題が残る。この学生にとって、あるいは外国人一般に、「現代物」以外は「歴史」という概念で一括できるのが普通だろうが、日本社会で大量に消費される「サムライ」の出てくる映画、ドラマは「時代劇」という特殊なジャンルを形成しており、明治時代以後、戦国時代以前を史実に基づいて製作されるようなもの以外、「歴史映画」という言葉が用いられることはない。毎日のようにテレビで放映される「サムライの出てくるドラマ」を意味しようとする時、日本人なら必ず「時代劇」という概念で捉えるのだから、内容を修正するつもりでこれに換える可能性を考えるべきだ。

原文から読み取れる内容をそのままにするのか、それとも場合によっては内容を一部変更することも辞さないのか、添削においては微妙なバランスが求められる。

2. 添削者と文体

前段では、程度差のように捉えられる添削の幅を考えたが、次に、添削が行う人によってどう違って来るかを見てみよう。一人の添削者が行う添削について考えたことが縦軸なら、今度は言わば横軸であり、これまでの考察を側面から見直すことになる。

以下に並べるのは先に筆者が添削した作文の写しを、五名の方にお願ひし、それぞれの方が適当と思われる程度に添削していただいたものである。

*下線部は移動、太文字は書き換え、字消しは抹消

「日本のテレビ」**B**

私の国と比べて、日本はテレビのチャンネルが多いと言える。~~私は~~**1**ヵ月ぐらい前、友だちがテレビをくれたので、よく見ていた。実は、チャンネルが**6**つもあるので、**その中から**いろいろな番組が選べるのだ。ドラマ、クイ

ズ、スポーツなどで好きなものはたくさんあると思う。日本語を練習するため、一番いいのは、ニュースだと思うが、今はまだ少し難しいと思う。一番難しいのは、歴史的な映画だと思う。この時代の話し方は、今とは違うなのだ。

クイズは楽しいが多くの場合はあまりわからないのだ。現代ドラマは、話しがいつも同じなので、わかりやすくなってしまった。

楽しみのため、外国語会話の番組を時々見ている。くつろぐためには、外国の映画は、テレビに音声二重放送がついているので、いつも原語版で見ている。

文句が一つある。コマーシャルが多すぎると思っている。

「日本のテレビ」C

日本は私の国と比べて、テレビのチャンネルが多いと言える。私は1ヵ月ぐらい前、友だちがテレビをくれたから、よくテレビを見る。実は、チャンネルは6つあるので、いろいろな番組の中から選べるのだ。ドラマ、クイズ、スポーツなどでおもしろいものはたくさんあると思う。日本語を練習するのに、一番いいのは、ニュースだと思うが、まだ少し難しいと思う。一番難しいのは、時代劇だと思う。古い時代の話し方は今と違うから。

クイズは楽しいが多くの場合はあまりわからないのだ。現代ドラマは、話しがいつも同じなので、わかりやすくなってしまった。

楽しみのため、外国語会話の番組を時々見ている。テレビに二語システムがついているので、くつろぐためには、外国の映画は、いつも原語版で見ている。

さいごに文句一つあるが。コマーシャルが多すぎるのではないだろうか。

「日本のテレビ」D

日本は私の国と比べて、テレビのチャンネル数が多いと言える。私は、1ヵ月ぐらい前（、）友だちからテレビをもらったので、よく見ていたことがあった。実に、チャンネルは6つもあるので、いろいろな番組の中から好きなものを選べるのだ。ドラマ、クイズ、スポーツなどのジャンルで好きな番組はたくさんあると思う。日本語を練習するために、一番いいのは、ニュースだと思うが、まだ私には少し難しいと思う。一番難しいのは、歴史的な映画だと思う。映画に出てくる時代の話し方は今とは違うなのだ。

クイズは楽しいが多くの場合はあまりわからないのだ。現代ドラマは、話しがいつも同じなので、よくわかるようになった。

楽しみのため、外国語会話の番組を時々見ている。くつろぐためには、外国の映画を見るが、それにはテレビに二語システムがついているので、いつも原語版で見ている。

日本のテレビに対する文句は一つあるが。コマーシャルが多すぎるのだ。

「日本のテレビ」E

日本は私の国と比べて、テレビのチャンネルが多いと言える。私は1ヵ月ぐらい前、友だちがテレビをくれたから、よく見ていた。実は、チャンネルは6つあるので、いろいろな番組の中で選べるのだ。ドラマ、クイズ、スポーツなどで好きなものはたくさんあると思う。日本語を練習するため、一番いいのは、ニュースだと思うが、まだ少し難しいと思う。一番難しいのは、時代劇の映画だと思う。むかしの話し方は今と違うからだ。

クイズは楽しいが多くの場合はあまりわからないのだ。現代ドラマは、話しがいつも同じなので、わかりやすくなってきた。

楽しみのため、外国語会話の番組を時々見ている。くつろぐためには、外国の映画を見る。テレビに二語システムがついているので、いつも原語版で見ている。

文句は一つあるが。コマーシャルが多すぎると思う。

「日本のテレビ」F

日本は私の国と比べると、テレビのチャンネルが多いと言える。私は1ヵ月ぐらい前、友だちにテレビをもらい、よく見ている。実は、チャンネルは全部で6つあるので、いろいろな番組の中から選べるのだ。ドラマ、クイズ、スポーツなどで、好きなものがたくさんあると思う。日本語を練習するのに、一番いいのは、ニュースだと思うが、まだ少し難しいと思う。一番難しいのは、歴史的な映画だと思う。それはその時代の話し方が今と違うからなのだ。

クイズは楽しいが多くの場合、あまりよくわからないのだ。現代ドラマは、話しがいつも同じなので、よくわかるようになった。

楽しむため、外国語会話の番組を時々見ている。テレビに音声多重放送のシステムがついているので、~~一つも~~くつろぐためには外国の映画の原語版を見ている。

欠点の一つある。それはコマーシャルが多すぎることだ。

これらの添削を一つ一つ読んでみると、それぞれどの箇所の書き直しももっともだと感じるだけで、一読しただけではどこが違っているのか、印象に残る箇所はそう多くない。文章の内容を変えないように心がけているのだからどれも同じように感じて不思議はない。そこで今度はこれらの添削を一文ずつ比べてみる。どこが同じで、どこが違うのか、拡大すれば見えてこよう。

*Aは先に提示した積極的添削である

(1)

O - 日本は私の国と比べて、テレビのチャンネルが多いと言える。

A - 日本は私の国と比べて、テレビのチャンネルが多いと言える。

B - 私の国と比べて、日本はテレビのチャンネルが多いと言える。

C - 日本は私の国と比べて、テレビのチャンネルが多いと言える。

D - 日本は私の国と比べて、テレビのチャンネル数が多いと言える。

E - 日本は私の国と比べて、テレビのチャンネルが多いと言える。

F - 日本は私の国と比べると、テレビのチャンネルが多いと言える。

この書き出しの文では、誤りと言えるほどの異常は筆者に限らず、だれも感じなかったと思えるのだが、小さな書き換えによってでもこのように少しづつ違ってくるのを見ると、たったこれだけの語数の文でも言葉選び、構文に対する感覚、いわば文体意識がそれぞれ微妙に違っているということがわかる。

(2)

O - 私は1ヵ月ぐらい前、友だちがテレビをくれたから、よく見ていた。

- A - 私は1ヵ月ぐらい前、友だちがテレビをくれたので、よく見ている。
- B - 私は1ヵ月ぐらい前、友だちがテレビをくれたので、よく見ていた。
- C - 私は1ヵ月ぐらい前、友だちがテレビをくれたから、よくテレビを見る。
- D - 私は、1ヵ月ぐらい前（、）友だちからテレビをもらったので、よく見ていたことがあった。
- E - 私は1ヵ月ぐらい前、友だちがテレビをくれたから、よく見ていた。
- F - 私は1ヵ月ぐらい前、友だちにテレビをもらい、よく見ている。

ここでは、文末の「よく見ていた」を筆者は1ヵ月前から現在まで続いているはずだと解釈し、誤りと判定した。「よく見ている」と書き直したのだが、**B D E**の三名が「1ヵ月前」を「くれた」だけではなく、文末の「よく見ていた」までかかる、つまり今は「あまり見ていない」と感じたようで、誤りなしとしている。また、**C F**の二名は筆者同様、現在でも「よく見ている」はずと解釈しているが、一人は書き直しの選択枝が違っており、「よく見る」と直している。

また、「から」は誤りだとは思わないが、筆者が「標準」と感じる「**ので**」に換えたが、おそらく同様の判断によってだろう、5名中3名が「から」を書き換えている。

「くれた」については**D F**の2名が「**もらった**」に換えている。これは筆者の目には不必要な書き直しのように見えるが、この2名が文頭の「私は」を抹消していないことも考慮に入れると、この複文では主語がどちらも「私」でそろっているべきだと判定したのだろう。

(3)

- O - 実は、チャンネルは6つあるので、いろいろな番組の中で選べるのだ。
- A - **実際**、チャンネルが6つもあると、番組をいろいろ選べるのだ。
- B - ~~実は~~チャンネルが6つもあるので、**その中から**いろいろな番組が選べるのだ。
- C - ~~実は~~チャンネルは6つあるので、いろいろな番組の**中から**選べるのだ。
- D - **実に**、チャンネルは6つもあるので、いろいろな番組の**中から好きなもの**を選べるのだ。
- E - ~~実は~~チャンネルは6つあるので、いろいろな番組の中で選べるのだ。
- F - ~~実は~~チャンネルは**全部で**6つあるので、いろいろな番組の**中から**選べるのだ。

「実は」では、4名が書き直すよりも取ってしまうほうを選んでいる。「**実は／実に**」、「**実際は／実際（に）**」、「**本当は／本当に**」の区別を問題とする場合なのだが、このような語彙を用いるのか、用いないのかでもその分選択枝が違っているということだ。

(4)

- O - ドラマ、クイズ、スポーツなどで好きなことはたくさんあると思う。

- A - ドラマ、クイズ、スポーツなど**で**、**おもしろいもの**はたくさんある**と思う**。
- B - ドラマ、クイズ、スポーツなど**で**好きな**もの**はたくさんある**と思う**。
- C - ドラマ、クイズ、スポーツなど**で****おもしろいもの**はたくさんある**と思う**。
- D - ドラマ、クイズ、スポーツ**などのジャンル**で好きな**番組**はたくさんある**と思う**。
- E - ドラマ、クイズ、スポーツなど**で**好きな**もの**はたくさんある**と思う**。
- F - ドラマ、クイズ、スポーツなど、好きな**ものが**たくさんある**と思う**。

「なとて」の「と」から「**ど**」への些細な添削もれはさておき、「**・・**などで」にするか、「**・・**など、」にするかでは文意が少し違ってこよう。「**・・**などで」だと「**・・**などの中で」のような意味あい、「ドラマ、クイズ、スポーツ」というジャンルに属する番組、例えばホーム・ドラマとか時代劇、またサッカー、テニスなどを考えている場合であり、「**なと、**」だと、ニュース、ドキュメンタリーではなく「ドラマ、クイズ、スポーツ」が好きだと言うような場合だろう。この解釈は3名づつ半々に分かれたことになる。

(5)

O - 日本語を練習するため、一番いいのは、ニュースだ**と思う**が、まだ少し難しい**と思う**。

- A - 日本語を練習**するために**、一番いいのは、ニュースだ**と思う**が、**私には**まだ少し難しい**と思う**。
- B - 日本語を練習**するため**、一番いいのは、ニュースだ**と思う**が、**今は**まだ少し難しい**と思う**。
- C - 日本語を練習**するの**に、一番いいのは、ニュースだ**と思う**が、まだ少し難しい**と思う**。
- D - 日本語を練習**するために**、一番いいのは、ニュースだ**と思う**が、まだ**私には**少し難しい**と思う**。
- E - 日本語を練習**するため**、一番いいのは、ニュースだ**と思う**が、まだ少し難しい**と思う**。
- F - 日本語を練習**するの**に、一番いいのは、ニュースだ**と思う**が、まだ少し難しい**と思う**。

ここでは、「**ため／ために／のに**」、「**難しい／難しいと思う**」、「**私には／-**」ぐらいの選択が関わるだけなのだが、何から何まで同じ文は出てきていない。

(6)

O - 一番難しいのは、歴史的な映画だ**と思う**。

- A - 一番難しいのは、**時代劇**だ**と思う**。
- B - 一番難しいのは、歴史的な映画だ**と思う**。
- C - 一番難しいのは、**時代劇**だ**と思う**。
- D - 一番難しいのは、歴史的な映画だ**と思う**。
- E - 一番難しいのは、**時代劇の**映画だ**と思う**。
- F - 一番難しいのは、歴史的な映画だ**と思う**。

ここまでで文章の総合的な印象、整え方についても違っている。文法的な違反ではないが、(1)において、「・・・と言える。」を筆者を含めて3名が抹消している。また、この作文中で5回使用されており、多すぎると感じられる「・・・と思う（と思うが／思っている）」については、(4)で、筆者を含め不必要と判定した添削者が4名、一文で2回使用される(5)の文末では3名、それに続く(6)では2名が抹消している。そして、抹消した者だけが不必要と判定したとは限らない。抹消しなかった者に、不必要とは思わなかった者もいるかもしれないが、不必要だということは使ってはならないという意味ではないのだから、不必要だと感じながら、これぐらいは書く者の自由だと、そのままにした者もいるだろう。

(7)

O - こんな時代の話し方は今より違うなのだ。

A - 昔の言葉遣いが今とは違うなのだ。

B - この時代の話し方は、今とは違うなのだ。

C - 古い時代の話し方は今と違うから。

D - 映画に出てくる時代の話し方は今とは違うなのだ。

E - むかしの話し方は今と違うからだ。

F - それはその時代の話し方が今と違うからなのだ。

「こんな時代」の書き直し方が上に見るようにまちまちなのもさることながら、「は／が」、「と／とは」のささいな助詞選び、「のだ／から／からだ／からなのだ」の文末のヴァリエーションを見ると、様々に試みられる文法事項の定義や用法の細やかな説明が使い分けの指標としてどれほど現実的だろうかと思わずにはいられない。このような差異すべてが使い分けられるものだと考えるより、ある量のヴァリエーション（地域方言、社会方言などがその典型、また語彙に限らず、助詞の使い分けについても）が等価値群を形成していて、方言、あるいは個人言語においてそのうちのいくつかは、例えば強／弱などの単純な基準で自由に使い分けられるだけだと考える方が現実的ではないだろうか⁴⁾。

(8)

O - クイズは楽しいが多くの場合はあまりわからないのだ。

A - クイズは楽しいが、多くの場合あまりわからないのだ。

B - クイズは楽しいが多くの場合はあまりわからないのだ。

C - クイズは楽しいが多くの場合はあまりわからないのだ。

D - クイズは楽しいが多くの場合はあまりわからないのだ。

E - クイズは楽しいが多くの場合はあまりわからないのだ。

F - クイズは楽しいが多くの場合、あまりよくわからないのだ。

「・・のだ。」は、この作文で、(3)、(7)、(8)と3回使用されているが、二文連続することになる(8)では全員が抹消している。この文末強勢の置き方について絶対の禁止規則があるとは思えないが、全員が、「使ってはいけない／使う必要がない／使わないほうがいい」のどれかを感じたようだ。

(9)

O - 現代ドラマは、話しがいつも同じなので、わかりやすくなってしまった。

A - 現代ドラマは、話していることがいつも同じなので、だんだんわかるようになってきた。

B - 現代ドラマは、話しがいつも同じなので、わかりやすくなってしまった。

C - 現代ドラマは、話しがいつも同じなので、わかりやすくなってしまった。

D - 現代ドラマは、話しがいつも同じなので、よくわかるようになった。

E - 現代ドラマは、話しがいつも同じなので、わかりやすくなってきた。

F - 現代ドラマは、話しがいつも同じなので、よくわかるようになった。

筆者が読んだ際、ここに使われた「話し」は「話」の送りがな違いで、「ストーリー／物語」という意味なのか、それとも「セリフ／話される言葉」という意味なのか解釈に迷った。この文章を書いたのがフランス人留学生であり、フランス語では「話す」という意味の動詞 parler から形成された「セリフ／話される言葉」という意味の名詞 parole / parlée の使用頻度が高いこと、また、「ストーリー／物語」という意味の語彙はまったく系統の異なる histoire が使われていることを考慮に入れ、「話される言葉」だと解釈した。ただし、言葉の表層部だけを意味しがちな「セリフ／話される言葉」のような語彙よりも、登場人物の話す言葉の内容となっているもの（ストーリーがマクロ内容なら、こちらはマイクロ内容ということになる）をはっきり指す「話していること」ぐらいが適切かと思えた。筆者以外には、一人が送りがな間違い、つまり「ストーリー」という意味であると判断したようだが、他の添削者は直しを入れていないため、どちらの意味に解釈したのかは分からない。

(10)

O - 楽しみのため、外国語会話の番組を時々見ている。

A - 日本語ばかりだと疲れるので、外国語講座を時々見ている。

B - 楽しみのため、外国語会話の番組を時々見ている。

C - 楽しみのため、外国語会話の番組を時々見ている。

D - 楽しみのため、外国語会話の番組を時々見ている。

E - 楽しむため、外国語会話の番組を時々見ている。

F - 楽しむため、外国語会話の番組を時々見ている。

「外国語会話の番組」とは何だろうか。日本のテレビで外国語が関係するものと言えば、「2カ国語放送」で外国語（主に英語）の副音声のついている番組か、外国語講座しかない。すぐ次の文が前者に該当するとすれば、ここでは後者だろうと考えられる。他の添削者は両方合わせた、より一般的な意味あいでも理解したのか、それともこのままで「外国語講座」と理解したためだろうか、手を付けていない。現実の番組名では確かに「・・・語講座」ではなく、「・・・語会話」が用いられているが、この種の番組が「・・・語講座」と呼び慣わされていることの説明もするような授業設定をしているため、他の添削者が書き直さなくてもいいと感じたところでも筆者の場合書き直すことがある。

(11)

O - くつろぐためには、外国の映画は、テレビに二語システムがついているので、いつも原語版で見ている。

A - のんびりするためには、外国の映画を見るのだが、テレビに副音声システムがついているので、いつも原語版で聞いている。

B - くつろぐためには、外国の映画は、テレビに音声二重放送がついているので、いつも原語版で見ている。

C - テレビに二語システムがついているので、くつろぐためには、外国の映画は、いつも原語版で見ている。

D - くつろぐためには、外国の映画を見るが、それにはテレビに二語システムがついているので、いつも原語版で見ている。

E - くつろぐためには、外国の映画を見る。テレビに二語システムがついているので、いつも原語版で見ている。

F - テレビに音声多重放送のシステムがついているので、いつもくつろぐために、外国の映画の原語版を見ている。

原文の「二語システム」はbilingueを直訳したもののようだ。6人中3人がそのままにしてあるように、このような直訳型の造語は日本人がどちらかという好み、受け入れやすいものだ。しかし、発音が短すぎ馴染みにくいせいなのか、使われていないように感じる。ただ、この表記の簡便さを考えると、テレビ、ラジカセの切り替えスイッチの表示にまれに用いられているのかもしれない。テレビ受像器の機能についてなら、「副音声システム」、「音声多重システム」ぐらい、またテレビ放送については、「2カ国語放送」、「音声多重放送」ぐらいが筆者の思い出せるものだ。ただ、これら現用語彙のどれもbilingueほどの簡明さがなく、まどろっこしく感じられるためか、それともこういう機能自体に関心の薄い人が多いためか、日本語の語彙としてそれほどしっかり定着しているとも思えない(今回確認のためにステレオの使用説明書を見たところ、このようなシステムの開発目標を表すために当初使用されたものと思える「音声多重」が、現在、主音声・副音声の「二つ」

しかないため、いつのまにか「音声二重」が用いられるようになってもいる)。また、「テレビに・・・放送がついている」のような言い回しも出ているが、厳密には「テレビに・・・放送の**見られるシステム**がついている」となるべきだとしても、日常的に用いられる一種の提喩（あるいは換喩）として、これぐらいは誤用ではなく慣用と見なすべきかもしれない。これは、**F**で、厳密には「音声多重放送が見られるシステム／音声多重放送受信システム」とするべきところが、よく耳にする「音声多重放送のシステム」となっていることについても言える。

(12)

O - 文句は一つあるが、コマーシャルが多すぎると思っている。

A - **イヤなこと**は一つあるが、コマーシャルが多すぎる**こと**だ。

B - 文句**が**一つあるが、コマーシャルが多すぎると思っている。

C - **さいご**に文句は一つあるが、コマーシャルが多すぎる**のではない**だろうか。

D - **日本のテレビに対する**文句は一つあるが、コマーシャルが多すぎる**こと**だ。

E - 文句は一つあるが、コマーシャルが多すぎると**思う**。

F - **欠点**は一つあるが、**それは**、コマーシャルが多すぎる**こと**だ。

この結びの前半について筆者が考えたのは、「文句」をそのままに、後ろを他の表現にするか、これを「イヤなこと」に書き換えるだけにするかぐらいだった。他の添削を見ると、「欠点」への書き換え、「は／が」の選び、「さいごに」、「日本のテレビに対する」の付け加え、など、筆者が思いもしなかったものがやはりいろいろ出ている。

一文ずつ比べると、ささいな違いばかりとはいえ、こんなにもばらつきが出るのかと驚く。しかし、どこを取ってみても、内容が他の書き換えとまったく違ったりはしない。確かにどの添削も共通の内容を持っている。ただ、それがすべてではないだけだ。その共通の内容を縁取るような差異、これも内容であることに変わりはない。この一見副次的な内容が見えるのは、このように他の添削と比べるからであり、どの添削も、それだけを読んだ時、共通の内容と縁取りの境界が見えるわけではない。ここでは二種あるように見えようと、文章やことばの意味はやはり連続体としてあるものだろう。

これら6つの文体差は6人の日本語を見せてくれた。そして、それぞれの添削者にやはり消極／積極の潜在的な幅があるのだから、ヴァリエーションはどれほどの数になるだろうか。こんなことは、わざわざこうした手続きを経なくとも考えられることだが、実例を見て確認してみると、言語という現象に対して抱いている通常のイメージ、つまり、社会的なものとしての言語とか個人的で内的な世界のように単一的に感じられる「ことば」と

はまた違い、多様で猥雑とも言えるイメージが喚起されよう。

3. おわりに

6つの添削を比べて、どれも正しい言葉だとは思いますが、自分のものとは違う。このようなごく当たり前の感じ方が示しているもの、それは社会的なものとして観念的に捉えられる言語と個人において実現されている言語との次元の落差だろう。ところで、差異というものはあらゆる意味の源となるものだが、書き直しが少しずつ違っているということは、その違いに応じて意味も違うということだ。すると、6名の添削者が同じ原文を読んだと言っても、そこに読みとった意味はやはりどこか違っていたのであり、それが書き直しの違いとなって表れたと考えられる。こうなると間違いと書き換えの問題から、もっと一般的な、言葉と意味、表現と解釈の問題ともなってしまう。

最後に、他の添削者の書き直しを筆者がどう感じたか述べておく。この添削において筆者の書き直し以上に、あるいは同程度適切だと思えるものはない。こう言うと、独断的に聞こえるかもしれないが、これは他の添削者も同じはずだ。自分以外の他の添削者の書き換えを比べて、そこに優劣を感じはするだろうが、それらが自分の書き直しより適切に見えるはしないだろう。どれぐらい書き直すべきかの判断においても、言葉選びにおいても、各人の判断で最適だと思えたからこそその書き直しをしているのだから。どんな意味の測定においても基準とできるものは常に自分の言葉だ。私たちは他の人の言葉を完全に理解することはできない。ただそれを目指して解釈し続けることはできる。そして、この解釈においても自分の言葉が常に基準となっていよう。

注

- 1) 中川正弘、「作文」を「読む」－「書く」技能の定位と展開、『留学生日本語教育』、第4号、広島大学留学生センター、1992年。
中川正弘、作文の誤りと文体、広島大学留学生センター紀要、第3号、1993年。
中川正弘、作文と解釈、広島大学留学生センター紀要、第4号、1994年。
中川正弘、外国人の日本語、日本人の日本語、『留学生日本語教育』、第6号、広島大学留学生センター、1994年。
- 2) 添削の違いを比べる試みはこれまで目にしていないが、翻訳が行う人によってどう違って来るか、文体差を見ようとする試みは外国語教育、外国文学教育の場でいくらかあるようだし、本来その機会も多いはずだ。最近目にしたものでは、村上春樹（『やがて哀しき外国語』、講談社、1994年）が日本人学生5人に吉行淳之介の小説の英訳を日本語に翻訳させ、吉行の文体をこの5人の学生の文体と比較することで確認するだけでなく、この5人の文体が興味深いずれを見せることにも言及している。そして、一見「正訳」だけの問題と見える誤訳も、こうした書き換えの文体差と見なせるかもしれない（ロビン・ギル、『誤訳天国』、白水社、1987年、別宮貞三、『誤訳名訳欠陥翻訳』、1981年、文芸春秋など参照）。

3) 文学研究において「印象批評」は主観的であるということで批判される。それは、主観的に解釈した内容を作品自体が表現しようとしている内容だと言い替えてしまう、あるいは等価値なものと扱ってしまうことが問題となるのであり、読書過程、解釈過程にこのような意識の主観的活動が含まれることまでが否定されはしない。客観的で厳密な分析が論証の正確さの裏で痩せたものを感じられこともあるだろうし、主観的で論理性に欠ける批評が豊かな内容を持つ場合もある。

4) ドメニコ・ラガナは『これは日本語か』（河出書房新社、1988年）において、助詞使用に関するアンケート結果から、日本人の助詞選びが文法規則で完全に捉えられないのではないかという感慨を述べている。ところで、**まぎらわしい**助詞選びについては度々アンケートを元にした分析が行われているが、「は／が」のように二者択一の形式で出題することに問題を感じることもある。こうした研究では、両方が可能な場合、あるいは可能な選択枝がいくつもある場合も積極的に見るべきではないだろうか。